
好きってなに？

弓永 詩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きってなに？

【Nコード】

N2412B

【作者名】

弓永 詩

【あらすじ】

高校三年になる主人公の神矢涼には、才色兼備の彼女の斎藤美紀がいる。涼は高校1年の春、彼女に一目惚れをした。そして、自分を好きになってもらおうと頑張つて、高校1年の冬に付き合うことになった。しかし、涼と美紀は趣味も性格も全く違った。だけど、涼は美紀に嫌われたくないため自分を抑えて、美紀に嫌われない性格をするように頑張った。高校3年の春、美紀とはクラスが離れ離れになった。そして、運命を変える人と出会った。

運命を変える出会い（前書き）

このストーリーは今彼女がいる人、いない人、それぞれが恋人や片想いの人を本当はどんな風に思っているのかを考えられる作品になると思っているので、ちょっと真剣に見てみてください。

運命を変える出会い

春の暖かい風が吹いて、新調したばかりだなと思わせる新入生がいる中

「うわ、見てみて高校入りたてみたいな制服を着て新入生が登校してるよ。可愛いね。」

という彼女は斎藤美紀。

「そうだな。俺らにもあんな時があつたんだよな。」

と二人で少し昔のことを思い出しながら俺と美紀は自転車で二人乗りをしながら学校へ向かった。

俺には才色兼備の彼女がいる。

俺は高校1年の春、彼女に一目惚れをした。

彼女はすごくモテて競争率は高かった。

俺は彼女に猛アタックの末、高校1年の冬に付き合い始めた。しかし、少し付き合ってみて、彼女とは価値観と趣味が全く合わないことに気付いた。けど、俺は彼女を失いたくなかったから、自分を抑えて彼女と付き合っている。俺はこれがいいと思っている。『好きなら趣味や性格が違っても関係ない』と今日、あいつに会うまでは…

「はあ、着いた、着いた。」

と自転車から彼女を下ろして駐輪場に自転車を置いた。

「そういえば、今日クラス替えだね。」

と彼女はおもむろに言った。

「そうだな。俺たち3年間同じクラスになれたらいいな。」

と笑顔で言った。

「けど、あのヒゲゴリラが私たちのラブラブぷりにムカついてたから変えられてるかもー。」

と笑いながら彼女は言った。ちなみにヒゲゴリラは1・2年時の担

任である。

「あはは、確にヒゲゴリラは相当俺らのことウザがってたもんな。」
と俺も笑いながら言い返した。

そんな話をしていると、掲示板上についた。そして、自分たちの名前を探した。

「あつた、あつた。俺はA組だ。美紀は？」
と聞くと。

「えー、私はF組だ。しかも、担任はヒゲゴリラだ。最悪。」
と悲しみながらこつちに来て。

「涼、浮気しないでね。じゃ、一緒にF組になった友達と行くから
また後でね。」

と笑いながら言った。

彼女はかなりマイペースなのである。かくゆう、俺も一緒のA組になった友達と教室に向かった。そして自分の席を探していると一番後ろの窓際だった。そして、そこには俺の運命を変える女の子がいた。だが、その時は知るよしもなかった。

自己紹介

あゝ、何で美紀と別々のクラスなんだ。ヒゲゴリラのイジメか。しかも、美紀は少しも悲しむ様子ないし。と、俺はかなり切なく荒れていた。

すると、担任の先生が教室に入ってきた。その担任は新任の先生だろうか、今まで見たことのない綺麗な先生だった。

「はい、みんな座って。」

と、言われてみんな自分の席に着いた。

「はじめまして、私は今日からこの学校に赴任してきました。竹島玲子です。私はあなたたちのことを全く知らないから今日のホームルームは自己紹介をしてもらいます。」

と俺は、めんどくせー何でこの傷心の時にしないといけないんだよ。「あつ、あと言ってもらうのは、名前と趣味と自分から見た自分の性格と所属クラブだからね。じゃ、出席番号1番から、はい。」

「えっ、名前は秋山……。」

と俺は自分の自己紹介を一生懸命考えていた。そして、とうとう前の人まできた。

「私の名前は緒方絵美。趣味は本を読んだり書いたりすることで、文芸部に所属しています。自分から見た性格は、少し控え目で傷付きやすいです。よろしくします。」

と俺は衝撃が走ったこの緒方絵美って子は俺と同じ趣味、同じような性格のもち主だということを知って。

「じゃあ、次。」

と言われて、俺は

「名前は神矢涼。趣味はバスケット。性格は何事にもどうじない性格。」と俺は緒方絵美と同じになるのが嫌で俺は美紀に嫌われないための性格を言った。しかし、こいつはどんな本を読んだり書いたりするんだろ。ホントは、モテるためにやったバスケット部なんかよりも、文

芸部に行きたかったのに。
俺は少し緒方絵美のことを気にしていた。

初めての会話

クラス替えから2週間たった。行きと帰りは、毎日美紀といるが昼は一緒に食べなくなった。あげくのはてに。

「涼、最近美紀ちゃんと一緒に昼を食べないが破局か？」

と笑いながら言ってくるやつまで現れる始末。

クラスが違うだけでこれだけ変わるんだなと少し思う俺。ちなみに、野郎共のマドンナである美紀を取った俺は野郎共の的である。まあ、美紀という彼女の代償だと思い我慢するしかない。あと、一番最悪なのは同じ部活の仲間がいないことだな。あー、神様がいるなら美紀と同じクラスにしてください。と、今言っても遅いが。

「キンコンカーンコン。」

と授業の始まりの音がなった。今日のこの時間は生物の実験だった。

「今日は二人一組で班を組んでもらう。出席番号順に班をくんだから前の席を見て、自分の席に座れ。」

と言われて、みに言った。

「えー、俺はここか。」

と隣に誰もいない所に座った。

しばらくすると、隣に人が来た。そして、あっちから話をかけてきて。

「はじめまして、緒方っていういます。これからよろしくね。」

と言ってきたのは、自己紹介の時に一番気になった緒方絵美だった。

「こちらこそよろしく。俺は神矢だから。」

ちよっとクールにいった。

すると、生物の先生が。

「今日は蛙の解剖をするから、各班前まで蛙を取りにこい。」
と言ってきた。

ヤバイと思った。俺は蛙が大嫌いなのだ。どうする俺？と心のなかで叫んでいると。隣で青ざめた顔をして。

「蛙…蛙…。神矢くん一人で出来る。」

と聞かれ、俺はとっさに。

「出来る。」

と言ってしまった。ここは男らしく腹を決めて行くしかない…が嫌
いものは嫌いこれは仕方がない。

ううん…ちよつと、待てよ。

「緒方さん、もしかして蛙嫌い？」

と聞くと。

「うん。」

と涙目で俺にうつたえかけてくる。

この女。俺にどこまで似れば気がすむんだと本気で思った。

「あのく、神矢くん。みんな蛙持ってきて実験始めてるよ。」

と言われた。

俺は仕方なく蛙を取りにいったが鳥肌がたつて、素手で持つことが
出来ない。

「早く持っていけ。」

と生物の先生はあおってくる。

俺は蛙を見ずにその又メ又メ感を我慢して班の所まで持って帰った。

「もしかして、神矢くんも蛙嫌いな？」

と俺が机にもたれかかりながらいる所に顔を近付けられて言われた。

「何で？」

とすぐ聞き返した。

「いや、何か顔を持って来るときもすごい顔をして走ってきたし、
行くのもためらってたし。」

何だ、バシてたのか。なら最初から素直に言えばよかったと思った。

「何か神矢くんには失礼かもしれないけど、私と何か感じが似てる。
負けず嫌いで、すぐ顔に出るところか。」

と笑いながら言われた。

俺は緒方も同じ風を感じているんだなと思った。

友達？

生物実験いらい俺と緒方は仲良くなっていた。元々、あまりクラスに友達がいなかった俺と緒方は休憩時間によく話すようになっていた。しかも、話せば話すほど俺たちは似た考えをもつことがわかった。

「でさ、最近いい小説ないかな？」

「うーん、どんなジャンルが好きなの？」

「俺は恋愛物語とかファンタジー系とかが好きかな。」

「何か神矢くんてや、何か思ってた印象と違うんだけど、私はもっと男らしく頑固なんかと思ってたら、私みたいな性格なんだもんね。」

と笑いながらこんな会話をしていた。

俺は今までと違って、素で話せる緒方はかなり楽しい。

放課後

「あつ、待った？涼。」

と美紀は来た。

「いや、今来たところ。」

「そう、じゃあ早く帰ろ。」

「そうするか。じゃ自転車を出すからちよつと待ってて。」

自転車を出した。

「よっ。」

と美紀は自転車に乗った。「最近、クラスの方はどうなん？」

「私のクラスは同じバスケット部の人とか、友達が結構いるから楽しいよ。涼は？」

「うちのクラスはバスケット部のやつとか、あんま友達いないから…あつ、最近よく話すやつが出来た。」

「へえ、どんな人？」
「うん、俺によく似た人かな。」
「へえ、今度私にも紹介してね。」
と会話をしていたら、美紀の家に着いた。
「じゃあ、また明日。」
「うん、またね。」
と行って帰った。

今日もまた、美紀と一緒に学校に来て、緒方と一緒に話してる普通の日。少し違うのは。

「涼。」
と教室に入ってきたのは美紀であった。

「おっ、美紀来たのか？」

「うん、涼の友達の様子を見ときたかったし。」

と言われたので緒方を紹介した。そして、緒方と美紀は黙ったまま、ちよつとの間が出来た。

「涼。ちよつと」

と教室の外に連れ出された。

「あんたの新しく出来た友達って女の子なの？」

と美紀は少し怒り口調で言われた。

「えっ、そうだけど。」

と俺は美紀の怒りの原因が少し分からなかった。

「彼女がいるのに、二人きりで女の子と話すってなに考えてるの？」

と言われ、俺は。

「えっ、緒方は友達なんだから、関係なくない？」

と言いつつうちに、

「キンコーンカーンコーン。」

とチャイムがなり美紀は帰っていった。

俺は授業中、男と女は友達にはなれないのかとずっと考えていた。

価値観

ケンカ（一方的に怒っている）以来、少し美紀との間に距離が出来てしまった。

一方、美紀の方も元通りになりたいと思っていたが、プライドの高い美紀は簡単に許す事は出来なかった。

「あゝ、どうしょ。」

と俺は彼女のことを緒方に相談していた。

「まあ、今回は私にも少し原因があるし、一緒にかんがえるよ。」

「ありがとう。」

「けど、彼女さんもそんな怒ることじゃないと思うけどね。」

「だよな。けど、美紀は少し気むずかしい所があるからな。」

と少し肩を落とす。

「何か、神矢くんと彼女さんて、あんまり性格が合ってないよね。」と少し見破られてた。

今までは美紀に合わせることばかりを考えていたから、考えなかったけど、やっぱり俺と美紀は価値観が合わないのかなと感じてしまう。やっぱり、価値観と合う人と付き合うのがいいのかなと緒方の方を不意に見てしまった。

「うん、何？」

「いや、あつ、そろそろ彼女の誕生日なんだ。そんときにプレゼントで許してもらおうかなと突然思ってた。」

と少し戸惑いながら言った。

俺の馬鹿、緒方とは友達だから。とか思っていると担任が来て、ホームルームが始まった。

日も暮れ、今日もバスケ部の練習も終わり放課後。

「お疲れ様。」

と美紀言うつと。

「おつかれ。」

少し冷めた言葉で言われた。

「今度の日曜日市内に行かない？」

「うん、いいけど。」

とまた、冷たく言われた。

「じゃあ、日曜の10時に駅で待ち合わせな。」

「うん。」

と返事が帰ってきた。

その後は、沈黙が続いて彼女の家まで送って。

「また、明日。」

と言って帰った。

そして、日曜日。天気は晴れて気温もちょうどいいくらい。そして、俺は待ち合わせ場所に待ち合わせの時間より10分前に来た。すると。

「待った？」

とちょっと前よりも機嫌のいい美紀が現れた。

「うん、今来たところ。」

という決まり文句を言った。

「今日楽しみだね。」

と美紀は何か機嫌がいい。

「うん、じゃ行こっか。」

と手を繋ぎながらホームまでいき、電車に乗って市内へ行った。

「今日は服とスポーツ店とCDショップに行こう。」

と美紀は言ってきた。俺はホントは本屋と古本屋に行きたいんだけどなと思いつつ今日も美紀の言う通り行動することにした。やっぱ、緒方の言う通り価値観が合わないのかなとちょっと不覚にも考えってしまった。

そして、まずは服屋に行き。美紀は服をみて、俺に。

「この服どう？可愛くない？」

と聞いてきた。

俺的には、ちょっと違うんだけどと思いつつ。

「いいじゃん、めっちゃ可愛いよ。」

と言う自分がいる。

こんな風にいつも、美紀の機嫌をとりながら行動してるなと考える俺。

スポーツ店にしろ、CDショップにしろまるで趣味が合わない。しかし、美紀の笑顔を見ると関係がない気がしてくる。

「じゃあ、次どこ行く?」

と美紀が聞いてきたので。

「俺はちよつとついてきて。」

と行って、美紀の趣味の綺麗な景色の見える場所に行った。そこで、俺は。

「誕生日おめでとう。」

と言って、プレゼントを渡した。これは、ピンキーリング。

「俺が好きなのは美紀だけ。だから、あんま心配しなくても大丈夫だから…あと、このピンキーリングに誓ってこのことを約束するよ。」

と言って、美紀はいきなりこっちに来て俺の唇にキスして抱きついてきた。

「ありがとう。このままいさせて。」

と行って仲直りをした。

無自覚

あの仲直りから俺と美紀は、さらに仲良くなれた気がする。昼食も二人で体育館で食べたたりするようになった。そのかわりと言うのは変かもしれないが、緒方と話す機会は減っていた。

「今日はお前たちに嬉しい知らせと悲しい知らせが同時にある。」
とバスケット顧問の高岡だ。

「実はな、このむさつくるしいバスケット部に新しくマネージャーが入ってくれることになった。」

と監督が言っているとバスケット部は飢えてるやつが多いのか、すごい大歓声だ。まあ、俺には関係ないなと思って部室に入ってきたのは…

「あのく、初めまして緒方絵美といいます。変な時期から入って迷惑かもしれないけど、よろしくお願いします。」

とよく教室で見る顔があった。

「えっ、何で？」

と驚いていると男子どもはいつせいに緒方に近寄って自己紹介やなんやらしていると、

「まだ、話は終わってない」

とバスケット部男子いつせいに静かになった。「実はな、今度の大会の対せん相手が決まった。」

いきなり、部室に緊張がはしった。

「鳳第一高校だ。」

みんないつせいに

「終わった。去年の県代表じゃないっすか。」

と先輩が言った。

そりゃあ、先輩たちの卒業試合だもんな。言いたくなる気持ちは分かるな。「けど、先輩！同じ高校生なんすから倒して引退をのばしましょうよ。もっと一緒にバスケしたいっす。」

本心から俺は言った。うちのバスケ部は中堅クラスで少人数のチームだが、みんな仲がいいからだ。

「そうだな、俺たち3年が負けると思ってたら駄目だよな。」

「そうだな。去年の県代表倒して俺たちが県代表になるっぜ！」

「おう。」

とみんな声をあわせた。

すると監督が話だした。

「よし、じゃあ今年の夏の合宿はいつもの倍のメニューをこなそうな。」

「え〜。あの地獄の合宿の倍っすか？」

というのも、うちのバスケ部は毎年夏のラストの大会に向けて合宿を行うのだが、半端なくキツク普段の3倍きついプラス体育館の中はサウナのように熱く毎年何人が脱落するほどきついのである。

「あ〜。みんなついてこいよ！」

「…。」

とみんなは静まりかえっていると

「みなさん、頑張ってください。私も出来ることはなんでもしますから。」

と緒方が言うと、

「はい。」

とみんないっせいに言った。

「よし、合宿は例年通り学校でやるからな。じゃあ、練習を始める。キャプテン始める。」

「はい、よしみんなランニングからだ。」

「はい。」

とみんないっせいに走り出した。

練習が終わり、俺は美紀との待ち合わせ場所まで行く。

「ごめん、練習長引いちゃって、待った？」

と俺は息を切らせながら走ってきた。

「うん、私も今来たところだから。じゃあ、帰ろっか。」

と美紀は手を出してきた。俺は汗ばんだ手を服になすりつけて美紀の手をにぎった。

「そいやーさ、女バスは1回戦の相手はどこだった？」

「1回戦はね、大蔵高校。うちと似たりよつたりのチームかな。」

「大蔵か、じゃあ練習すれば勝てるかもな。」

「そうなんよ。だから頑張る。涼たちはどうなの？」

と聞かれて少し沈黙して。

「鳳第一高校。」

美紀はかなり驚いた顔で、

「えっ、鳳第一高校って去年の県代表じゃない！大丈夫？勝てるの？」

「先輩たちの引退をのばさせてあげるように頑張るよ！」

と勝てるか勝てないかは答えられなかった。

「そっか、悔いの残らないようにね。」

「うん。」

俺は内心、美紀に

「勝つと思わなきゃだめよ。弱気になるな。」と言ってほしいなと思っていると、美紀の家に到着し、

「じゃあねー涼。」

「うん。また明日！」

と別れた。

そして、暑い暑い夏休みが来た。そして、バスケット部の合宿はスタートした。

「行くぞ。ほら田所ぼけつとしてないで周り見る。」

「はい。」

と実践形式の練習試合を行っている。

「パス。」

と俺はボールをもらって、綺麗な弧を描いて

「スパ。」

とこの試合8本目のスリーポイントを決めた。

「ナイスだ。神矢。」

とふいに監督が言ったので、監督の方を向くと緒方が俺の方を向いていた。

練習が終わり、着替が終わって水場に行くとき緒方いた。

「おつす、お疲れ様。」

「お疲れ様。神矢君ですごいんだね。あんなスパスパゴール決めちゃうんだもん。」

と緒方は本心から言ってるべく、俺はちょっと恥ずかしがりながら、

「あれは俺の最大武器だからね。まあ俺はこれでも、ポイントゲッターだから頑張らないとな。」

「そうか、神矢君がいれば今度の試合も勝てるんじゃない？」

「一生懸命は頑張るよ。」

とまた、勝てるか勝てないかはいえなかった。すると、

「駄目だよ。試合が始まるまでは勝てると思ってない！」

と言われ、俺はドキッとした。何で緒方は俺が言ってほしいことをこつこつ簡単に言ってくれるのかな。

「神矢君。」

「あつ、すまん。そうだな、じゃあ勝ってみせるよ。」

と俺は緒方に言った。

合宿は終わり。試合当日。

「美紀らと試合かぶってるな。」

「うん。応援に行けないけど頑張ってるね、涼。」

「美紀もな。じゃあ、チームに戻るわ。」

と試合前に会話をしてチームに戻ると。

「熱いね。」

先輩にいじられながら、監督が

「今日のメンバーを発表する。まず、キャプテンの柊、副キャプテンの田所、次に柳、神矢、広瀬。以上いく。」

「はい。」

とスターティングメンバーに選ばれた。

「みんな行くぞ。」

と言われてコートに向かう途中に鳳第一高校のジャージをきた生徒たちがいて、近くに行くと20センチくらいの背のさがあるやつがうじゃうじゃいて俺たちはショックを受けた。

そして、

「ピー」

と笛と同時に試合が始まった。

「パス、くらえ。」

とシュートを打とうとした瞬間デかい壁にはばまれシュートを打つことが出来なかった。

そして、試合は一方的になり俺はシュートをブロックされたことにより、心が折れて、ミスを連発してしまい、

「ピー、交代。」

と第3クォーター途中で交代させられた。

「神矢、ちよつとベンチで落ち着け。」

と監督に言われ、ベンチに腰かけると

「はい、水。」

と緒方がきた。

「大丈夫。まだ諦めたらいけないよ。バスケのことはよくわからないけど、心が負けたらだめだよ。」

と俺はいたい所をつかれた。確かに緒方のゆうとうりだ。心で負けていた。今までシュートをブロックされたことなんかなく、シュウクを受けた。しかし、それじゃ駄目だ。緒方とも先輩たちとも約束したじゃないか。

「ピー。」

第3クォーターの終わりの笛が鳴った。

「神矢、行けるか？」

「はい。」

とさつかまでとは全然違う顔付きで言った。

「よし、行ってこい。」

「ピー。」

最終クォーターが始まった。

「パス。」

もらった瞬間

「いけー！」

と緒方の声が聞こえ、シュートをはなち

「スパ」

と先制をきめた。

そのあと、連続でシュートをきめるが接戦まで持ち込んだが負けてしまった。

「先輩。すみませんでした。引退をのばさせてあげるように思ったのですが、実力不足で。」

すると、キャプテンが

「何言ってる。精一杯がんばった結果だろ。次のキャプテンがそんな暗くてどうする。頑張れよ。」

とキャプテンは涙を流さずにコートからさっさと行く。

「みんなあがれ、変える準備だ。」

と監督は言った。

「ちよっと、トイレにいつてくりわ。」

と俺はトイレに行くと「くそ、もっと俺がしっかりしていれば。」

という涙声のキャプテンの声が聞こえていた。

「キャプテン。」

「うっ、何だ神矢？」

涙をみられないようにして、

「今までありがとうございます。このチームはキャプテンがいたからこそ、成り立っていたんです。だから、胸をはってください。」

「うっ、神矢：ありがとうございます。」

とキャプテンはトイレをでていく。

そうして俺は涙を流した。

しばらくして緒方が迎えに来た。

「神矢君、早くこいって。」

「わかった。」

「ねえ、今日の試合おしかつたよ。最終クォーターだけなら圧勝だったし、そんな落ち込まないで。」

何で緒方はこうも俺の気にしていることをすばつといい当てるのかな。

「ありがとう。」

そうして、夏は終わった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2412b/>

好きってなに？

2011年1月19日02時49分発行